

⑤ 大正デモクラシーと政党内閣の成立

課題 大正時代の社会や政治にはどのような特色があるのでしょうか？

【① 運動】

日露戦争前後は立憲政友会と藩閥、官僚勢力が交互に政治を行っていました。1912年（大正元年）に藩閥の桂太郎が3度目の内閣をつくると、議会を無視する態度をとったとして、新聞や知識人などが憲法にもとづく政治を守ろうとする運動を起こしました。

以下の二人は、そんな大正時代に活躍した人物です。二人がこの時代に、主張していた考え方はどのようなものだったのか、資料を読んで、ふき出しにまとめてみよう。

民本主義



▲吉野作造
(1878~1933)

民本主義は従来、民主主義という文字をあてられていたようだ。時としては、民衆主義とか平民主義とか呼ばれたこともある。しかし、民主主義では「国家の主権は人民にあり」という学説と混同されやすい。また、平民主義といえば、平民と貴族を対立させ、貴族を敵にして、平民に味方する意味に誤解される。一方、民衆主義に関しては以上のような欠点はないけれど、民衆を「重んじる」趣旨が伝わらない。憲政の根底は政治上、貴賤の区別なく、一般の民衆を重んじ、また政治は一般の民衆の意向にそって行わなければならないのだ。
〔民本主義論〕要約 吉野作造著

憲法を大切に行う政治では、貴賤の区別(差別)をなくし、(②)を大切に、また、政治は(②)の思いに沿って行わなければならない。言論の自由と民意を反映した政党政治の確立を主張し、(③)主義を唱えた。

天皇機関説



▲美濃部達吉
(1873~1948)

……我々は統治の権利主体は、国体としての国家であると考え、天皇は国の元首として、言いかえれば国の最高機関として、この国家の一切の権利をにぎり、国家の一切の活動は立法も行政も司法もすべて、天皇にその最高の源を発するものである。
〔一身上の弁明〕1935年2月25日 第67回帝国議会貴族院より

主権は(④)にあり、(⑤)は国家の最高機関として憲法に従って統治する。だから、政党内閣が必要だという理論的根拠を、(⑥)説で唱えた。

◆このように、専制政治（国王などの権力をもつ者が、ひとりの意思で自由に国家を治める政治）に対して、権力は人民（国民）にあり、国民が中心になってその権力を行使するという考えが広まりました。（下線部をより簡潔にまとめると…）

大正時代に、さかんになった(⑦)の思想を広げる

国民は具体的に何を求めたのかというと…(⑧)(デモクラシー)

◆大戦景気と米騒動



第一次世界大戦によって、日本の経済は好景気をむかえた。(大戦景気)綿布などの日本製品がアジア・アフリカに輸出される一方、欧米からの輸入が途絶えたために国内の重化学工業が発達し、工業国としての基礎が築られました。これまでの輸入超過は一転して輸出超過になり、好景気を迎えました。しかし、好景気はいっぽうで物価の(⑨)をまねき、

労働者や農民の生活はかえって苦しくなりました。1918年の(⑩)による米の買い占めから米価が跳ね上がると、米の安売りを求める運動(⑪)が全国に広がりました。(この騒動は、富山県の魚津町から始まりました。)

◆本格的な政党内閣の成立

米騒動により、寺内正毅内閣が退陣すると、1918年、衆議院第一党(もっとも議員の数が多き政党)の立憲政友会総裁の(⑫)を首相とした本格的な(⑬)が成立。(⑭)(⑮)(⑯)の3大臣以外はすべて立憲政友会の党員。

<原敬>岩手県出身の士族であったが、自らその身分を捨てて平民となりました。今までの首相とは違い、華族ではなかったことから、「平民宰相」とよばれ、国民に人気がありました。1919年に選挙法を改正し、選挙権をもつのに必要な納税額をそれまでの10円以上から3円以上に引き下げました。しかしながら急激な変化を恐れ、普通選挙法には反対をしました。



まとめ
